［大野城市立御陵中学校］

令和２年１１月発行　学校便り

学校の詩（うた）

学校の教育目標

自律貢献

文責：校長 藤井浩彦

◆共に歩く「錬歩会」

１１月２０日は雨も上がり、歩くには暑くもなく寒くもなくちょうどいいくらいの天気となりました。事前の天気予報では雨が心配され、果たして実施できるかと大変不安な状況でした。まずは、三学年全員で取り組んだこの行事が事故なく実施できたことを大変うれしく思います。

多くの行事が中止になる中、３年生がリーダーシップを発揮し、全校生徒で共に達成感を味わえる行事ができないかと模索してきました。その中で出てきたのがこの「錬歩会」です。御陵中学校で初めて取り組む行事ですから、まずは生徒の安全面に一番配慮しながら計画を立てていきました。もちろん、先生方で事前に下見をしました。歩きながら、「経過時間」「危険箇所」「休憩場所」「トイレ」等の確認を、写真とメモを取りながら実施しました。また、そのことを全職員で共有し、次は分担ごとにさらに細かい計画と打ち合わせを行いました。安全指導の面では教職員だけでは難しいと判断し、ＰＴＡ本部に協力を依頼すると快く引き受けてくださいました。そのため、当日は多くの保護者の方にボランティアとして全２０カ所ほどのポイントに立っていただき、子ども達が事故にあわないよう支援していただきました。ＰＴＡの方々には、消毒用の容器の準備や昼食時のオレンジジュースの差し入れ等もしていただきました。

【道中の生徒の様子】

【昼食時の様子】

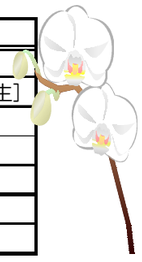
久しぶりに運動する生徒もいたと思いますし、ましてやこんなに長距離を歩くこともなかった生徒もいたと思いますが、３年生を中心にお互いに声を掛け合いながら、頑張って歩きました。３年生の「車きたよ！右によけて！」とか、「歩行者が来られたから、左によって！」とか、「大丈夫？ここで水分をとってください！」「さぁもう少し、頑張ろう！」などの配慮ある声かけに、本当に３年生って素晴らしいなぁと改めて思いました。また、生徒は列もほとんど崩すことなく、リーダー達の指示にしたがってマナーよく歩いていました。白水大池公園での食事では、写真にも写っているように笑顔で気持ちよさそうに昼食をとっていました。その後生徒は、少しばかりの休息をとり、御陵中学校を目指しました。きっと帰りの道のりの方が随分ときつかったに違いありません。一人なら挫折したかもしれませんが、「共に歩く」ということは、やはり勇気や元気がわいてくるのだと思います。

閉会式で３年生ブロック長の左くんが言ってくれた「一人なら出来ないことでも、仲間がいればやり遂げられる」こと、そして、南橋先生の「共に歩くことで、御陵中学校の皆さんが一つの強い絆で繋がっているということを実感しました」という言葉を胸に、これからも生徒の皆さんにはどんな困難にも負けず、共に支え合い、日々成長してほしいと願います。

最後に、ボランティアでご協力いただきましたすべての保護者の皆様、笑顔で迎え送り出してくださって本当にありがとうございました。きついことが吹き飛ぶくらい、とても元気がわきました。生徒達はもちろん、私たちすべてが保護者の皆様に支えられていることを改めて感じました。心から感謝いたします。今後ともどうぞ、ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

【今後の行事予定】

月	日	曜	行　事	月	日	曜	行　事
11	26	木	立会演説会・投票	12	18	金	ワックスがけ
	27	金	３年生三者面談(12/4まで)		21	月	夢講座[講師:熊丸みつ子先生]
	28	土	登校日・市民総ぐるみ防災訓練		24	木	終業式　※昼食あり
	30	月	振替休日				生徒会リーダー研修会
12	4	金	３年生を励ます会		25	金	生徒会リーダー研修会
	7	月	生徒会新旧交代式	1	7	木	生徒会リーダー研修会
	8	火	御陵中ブロック授業研修会		8	金	始業式　※昼食あり
	11	金	３年生クラスマッチ				



『親孝行な子は伸びる』

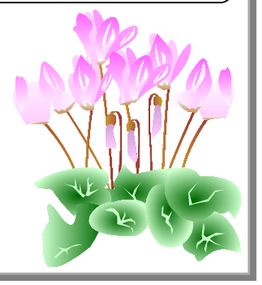
校長コラム

今回の「錬歩会」で、私たちはもちろんなのですが、子ども達も保護者の方（親）のありがたさをしっかりと実感していると思います。今日は、「親孝行」ということについて考えたいと思います。

自分自身を振り返ってみると、私の中学時代は反抗期に入っていました。情けない私は、自分の両親を「お父さん」「お母さん」と呼ぶのが照れくさいと思うようになり、どうしても用があるときには「ねぇ」とだけ呼んで、必要最低限のことしか話をしない時期がありました。しかし、だんだんと年齢を重ねるごとに、親の偉大さ、素晴らしさ、そしていかに愛されていたがが次第にわかるようになってきました。そして、１２年前に母が亡くなり、２年前には父も亡くなって、そのたびに「もっと親孝行しておけば･･･」と後悔しました。もしまだ生きてくれていたら、こんなところに連れて行ってあげたいとか、こんなことをしてあげたいとか未だに思います。「親孝行、したいときには親はなし」ということわざもありますが、今ではその言葉が身に染みます。

野村克也さん(元プロ野球選手･監督)の『野村の言葉』という本の中に、「どの分野においても親孝行な子は必ず伸びる」というタイトルで、以下のような内容が書かれています。

> 感謝できない人間は伸びない。人間、一番世話になっているのは親である。親孝行な子は感謝を十分に知っている。「親の喜ぶ顔が見たいから、一生懸命目の前の仕事に取り組む」この姿勢こそが、人間をよりいっそう成長させるための原動力になる。
>
> ２０１７年の大相撲初場所で大関の稀勢の里が初優勝を飾り、第７２代横綱に昇進した。大関になってから苦節５年、何度も優勝するチャンスがありながらことごとく跳ね返され苦汁を味わった。それだけに喜びもひとしおだろう。
>
> 彼が優勝したとき、相撲界の父親ともいうべき存在の親方のことを挙げ「親方がいなければ、今の私は存在しない。感謝以外の言葉が浮かばない」、またご両親に対しても「ケガや病気のない丈夫な体にしてくれて感謝している」という言葉を口にしていた。なるほど、彼が幾度も優勝の壁に跳ね返されながらも、ついに花開き、相撲界の頂点に昇りつめた理由がわかる気がした。
>
> 親孝行な子は必ず伸びる。これは断言できることだ。ほかならぬ私自身がそうだった。父が戦争で亡くなり、幼少から母子家庭での貧乏生活を余儀なくされた。それでも野球を続けさせてくれた母に恩返しがしたい一心で、プロ野球の第一線で活躍し続けた。もし私が裕福な家庭で育っていたら、「プロ野球選手・野村克也」は存在していなかった。いや、仮にプロ野球選手になっていたとしても、大きな壁を乗り越えられずにあっさりユニフォームを脱いだに違いない。人間が伸びるにはハングリーさが必要だが「親に感謝する」という気持ちも決して忘れてはならないことだ。　　・・・（中略）・・・
>
> 今現在、プロ野球選手として存在できているのは、何よりも親のおかげだ。無条件に子どものことを愛し、尽くしてくれ、野球を続けさせてくれる環境を整えてくれたからこそ、プロの世界に足を踏み入れることができている。親以外にも、学校の先生だったり、あるいは高校野球の監督だったり、はたまた先輩だったりと、本当にさまざまな方に支えていただいたおかげで、プロ野球選手になれたのだ。この方々への感謝の気持ちを持つことができないようでは、選手としても大成できないし、その後の人生でもうまくいくはずがない。
>
> これは、一般的な会社でも同じだろう。感謝の気持ちがない者は、天性の才能によって一時的には成績を残せても、続きはしない。いろいろな人の支えがあってはじめて長期的に成績を残すことができるのである。親孝行な子は、感謝の心を十分に持ち合わせている。だからこそ、どの分野でも伸びるのだ。

一番身近な親への感謝の気持ちを持つことが、何よりも大切だと教えてくれているのだと思います。「親孝行」の形は人それぞれであっても、まずは「感謝の気持ち」をもつことができるかどうかだと思います。親への感謝の気持ちが、すべての人やものへの感謝と繋がり、そのことがさらに自分自身の「原動力」となって、どんな分野であっても頑張り抜くことができると野村さんは言われているのだと思います。

本校では、親や家族への感謝、すべての人やものへの感謝ができる子ども達を育てることができるように、日々の教育活動にこれからも取り組んでいきたいと思います。